

—実践報告—

小児科外来実習における看護学生の学び

白坂真紀 桑田弘美

滋賀医科大学医学部看護学科 臨床看護学講座

要旨

継続看護の役割を担う外来看護を学ぶことは、在宅医療を推進する国の指針であり看護基礎教育における習得課題でもある。特に成長・発達途上にある子どもにとって、家庭を基盤に保育園や幼稚園、学校など地域での生活を維持し、社会化を促すことは重要である。今回、小児看護学実習における外来実習の記録を分析し、看護学生の学びを明らかにした。小児科外来実習において学生は、【複数の専門外来の存在】を知り、【成長・発達途上にある子どもの特性】を学んでいた。そこから、成人とは異なる【小児処置技術の特殊性】、【安全・安楽な看護実践】を通して、看護師の【子どもを力づけるかかわり】をみていた。【看護の対象は子どもと家族】であり、親の【育児不安の実際】を知り、【子どもと家族の地域生活支援】について学習していた。多忙で多様な外来業務の中で【看護師の現場調整力】を感じ、【発育に配慮した看護実践を体験】していた。

キーワード：小児科外来実習、看護学生

I はじめに

人口の高齢化、慢性疾患患者の増加、在宅医療の推進、平均在院日数の短縮化等により外来医療・看護も変化した。医療技術の進歩により、短期滞在（日帰り）手術やがん化学療法など高度な治療は外来でも受けることが可能な時代となってきた。これらの変化により、疾病を持ちながら地域で生活している患者が増え、長期間にわたる外来での継続治療など、外来における医療・看護提供の必要性が高まっている¹⁾。特に成長・発達期にある子どもの医療や看護の分野でも、在院日数の短縮、在宅療養の推進より、退院後の地域での生活における継続的な看護支援が望まれている。小児看護学実習で継続看護の視点を学ぶ方法としては、病棟実習や療育施設で展開している大学がある²⁾。また小児看護学実習を外来実習単独で行っている大学³⁾もあり、その方法は一様ではない。本学看護学科3～4回生における領域別実習・小児看護学実習では、小児科外来実習（以下、外来実習）を半日設けている。本研究では、小児外来実習における看護学生の実習記録より、学習した内容の詳細を明らかにすることにする。

II 研究目的

小児科外来実習の記録から、看護学生の学習した

内容の詳細を明らかにする。

III 研究方法

1. 調査対象

小児看護学実習を履修し、承諾が得られた56名の看護学生の小児看護学実習の外来実習の記録を分析データとする。

2. 研究期間

研究期間は2012年4月～2013年10月であった。

3. 分析方法

分析は質的記述の方法を用いて行った。筆頭著者が、記録の表現を忠実に要約（コード化）し、意味内容の共通事項ごとにサブカテゴリーとして命名し、さらにそれを抽象化しカテゴリーとした。カテゴリー抽出の妥当性を高めるために、小児看護教育を専門とする共同研究者よりアドバイスを得た。

4. 倫理的配慮

学生に研究の目的と方法、小児科外来での実習記録をデータとすること、研究への自由意思による参加、個人情報保護の厳守について説明し、同意を得た。成績評価に影響しないよう、学生の卒業判定後に行った。患児とその家族および学生自身の個人情報特定される可能性のある文章は除外した。

5. 小児看護学実習の概要

大学3回生(10~12月)から4回生(5~7月)の期間にある領域別実習の間に、2週間(10日間)の小児看護学実習を行っている。小児看護学実習の内容は、小児病棟(8.5日)、小児科外来(0.5日)、NICU/GCU(1日)の3部署を組み合わせて実習を行っている。外来実習の目標は、小児の地域での生活を想定し、継続看護と他職種との連携について考えることである。具体的には、「外来での医療・保健活動から地域で生活する小児と家族への生活を考える」、「小児保健活動や福祉に関わる機関及び職種とその活動内容について考える」こととしている。実習内容としては、小児科外来の診察場面の見学、外来看護師の業務見学、検査や処置における可能な範囲での介助、小児と家族への医療・保健活動から地域で生活する小児への看護について考察することである。外来実習では、学生3名に対して外来看護師1~2名が実習指導を担当している。学内における外来看護についての講義と演習は実習開始前に終了し、講義は3回生の育成期小児看護学(1コマ)で行い、演習項目は検査や処置の介助などを行っている。

6. 小児科外来の概要

外来実習はA大学病院小児科外来で行っている。専門科目は、総合、循環器、血液、神経、新生児、発達、心身症、生後1ヵ月健診、内分泌代謝、腎臓、アレルギーである。看護学生が実習する曜日の専門外来は、新生児NICU退院後のフォローアップ健診、発達外来などが開設されている。

IV 結果

外来実習における看護学生の学びについて、308コード、31のサブカテゴリーから、10カテゴリーが抽出された(表1参照)。各カテゴリーを抽出するまでの過程を述べる。カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、コードを[]で示す。

小児科外来実習において学生は、【複数の専門外来の存在】を知り、【成長・発達途上にある子どもの特性】を学んでいた。そこから、成人とは異なる【小児処置技術の特殊性】、【安全・安楽な看護実践】を通して、看護師の【子どもを力づけるかわり】をみていた。【看護の対象は子どもと家族】であり、親の【育児不安の実際】を知り、【子どもと

家族の地域生活支援】について学習していた。多忙で多様な外来業務の中で【看護師の現場調整力】を感じ、見学のみではなく【発育に配慮した看護実践を体験】していた。

1. 【複数の専門外来の存在】については、[小児科外来の中でも各専門領域に分かれている]、[小児科外来は内分泌疾患や神経疾患、NICU退院後の子どもなどが来る]などのコードから〈専門分野に分かれた外来〉というサブカテゴリーをあげた。以下同様に、[SGA治療について、経済面や学校・地域生活を踏まえ、治療・看護・副作用のモニタリングの実際を学んだ]、[自閉症患児には言葉の説明だけではなく、視覚的アプローチを用いて採血を実施していた]などから〈多様な疾患の治療と対応〉を、[一組の親子に30分程度診察され、良さを感じた]や[医師は資料や数値をあげて母親の質問に応じていた]などから〈医師による丁寧な診察〉をサブカテゴリーにあげた。

2. 【成長・発達途上にある子どもの特性】は、[身体計測により成長具合をみていた]や[定頻、寝返りなどみていた]などから〈成長と発達の確認〉を、[出生時に800gの子どもがこんなに大きくなるんだと知った]や[新生児と4か月の赤ちゃんを抱っこして子どもの成長が体感できた]などのコードから〈子どもの発育過程に喜びと驚き〉というサブカテゴリーをあげた。[病状だけではなく、全身観察や母子関係も短時間で観察する必要がある]、[新生児など子どもはコミュニケーション能力が発達途上にあるため、細かく観察することが大切]などから〈観察の重要性〉を、[多くの子どもとの触れ合いで様々な子どもの個性がよくわかった]、[診察室の玩具で子どもは夢中になって遊んでいた]などから〈子どもの多様性〉をサブカテゴリーとした。

3. 【小児処置技術の特殊性】は、[採血時、子どもは啼泣し、汗をかいていた]、[注射や採血は子どもにとって負担が大きく、辛いことがよくわかった]などから〈処置を受ける子どもの苦痛〉をサブカテゴリーにあげた。[子どもの体に合わせた3種類の計測器が用意されていた]や[針は細いものを使用し、最少量の採血をする]などから〈子どもサイズの器具と道具〉を、[子どもの採血は血管が細く難しい]、[他科の医師から子どもの採血依頼が来る]などのコード

から、〈子どもの処置に必要な特殊な技術〉をサブカテゴリーにあげた。

4. 【安全・安楽な看護実践】は、[安全を優先して採血の介助をしていた]、[発熱している患児は感染予防のため別室で診察する]などから〈子どもの安全を確保する看護〉を、[採血は1回で済むよう心掛けておられた]や[採血をスムーズに終わらせられるよう体の固定と声掛けを行っていた]などから〈子どもの負担軽減を考えた看護〉というサブカテゴリーをあげた。

5. 【子どもを力づけるかかわり】は、[こまめに話しかけることが大切]、[採血では子どもを褒めていた]などから〈子どもへの言葉かけ(称賛)の重要性〉、[採血では好きな絵の描いたテープを選んでもらっていた]などから〈子どもの意欲を引き出す工夫〉、[採血では辛く痛い思いをしている子どもが可哀想だった]などから〈子どもの処置場面に心痛〉、[年齢に応じた声掛けや説明を行っていた]などから〈プレパレーションやディストラクションの実際〉とした。

6. 【看護の対象は子どもと家族】は、[子どもの様子を一番知っているのは親である]などから〈親の存在の重要性〉、[処置後に親の顔を見たら泣き止む子どもばかりだった]などから〈子どもと親のつながり〉とした。

7. 【育児不安の実際】は、[早産児や疾患をもつ子どもの家族は正常な発育などわからず不安になる]などから〈家族の不安の理解と対応〉、[母親が自信を持って育児できるよう話をしていた]などから〈育児不安を軽減する受容的なかかわり〉とした。

8. 【子どもと家族の地域生活支援】は、[外来は病気と上手に付き合っていけるよう環境を整える場である]などから〈在宅療養支援の実際〉、[カルテや看護師間のやりとりが行われケアの継続がなされていた]などから〈継続看護の実際〉、[医師と連携して患児に医療を提供していることがわかった]などから〈病院・地域における専門職間の連携〉、[慢性疾患のため幼児期から成人になっても小児科外来で治療を受けている]などから、小児難治性疾患などの慢性疾患を抱えながら成人期の年代に持ち越す⁴⁾〈キャリアオーバーの問題〉とした。

9. 【看護師の現場調整力】は、[外来は病棟とは異な

る忙しさがあった]などから〈多様・多忙な看護師の役割〉、[子どもと家族に看護介入するため幅広いコミュニケーション能力が必要]などから〈看護師の対人関係能力に感心〉、[子どもが睡眠中や授乳のときは受診の順番を調整していた]などから〈外来診察時間の調整と短縮〉とし、[医師と家族が落ち着いて話せる環境をつくるため看護師は子どもをあやしていた]などから〈丁寧な診察場面の創造〉とした。

10. 【発育に配慮した看護実践を体験】は、[様々な診察や処置を学ぶことができた]や[円城寺式の使い方を学んだ]などのコードから〈実習で多くの業務(場面)を見学・実施〉を、[赤ちゃんを抱っこして診察のお手伝いをさせてもらい嬉しかった]、[一人何回も新生児の移動と抱っこができた]などから〈子どもを抱くなど自分が役立つ充実感〉、[小児科独特の処置技術を今後に生かしたい]、[一生懸命生きている小さな命をできる限りの看護でサポートしたい]などから〈学んだ看護を実践で取り入れる意欲〉をサブカテゴリーとした。

V 考察

学生は、地域のクリニックとは異なり疾患に応じた複数の専門外来があることを学んでいた。医師の丁寧な診察場面や看護師の子どもへのかかわりを通して、成長・発達途上にあるという子どもの特性⁵⁾を理解していた。成熟過程にある子どもの身体的な特徴を踏まえ、子どもサイズの医療用具を見たり、採血などで用いる血管を確認するライトの存在を知るなど成人看護とは異なる小児処置技術の特殊性を学習していた。認知能力が発達過程にある子どもの安全の確保と負担軽減の工夫など安楽な看護の実際という看護の基本と、発達段階に合わせた説明(プレパレーション)や処置から意識をそらす関わり(ディストラクション)など小児看護特有の子どもを力づけ、がんばりを引き出す関わりについて学んでいた。疾患をもち治療を受けるのは子どもであるが、その子どもの健康を守る養育者である母親や父親など家族も看護の対象であることを再認識していた。育児不安や小児虐待の問題が課題である昨今、小児科外来が子育て支援の場としての機能をもち、子どもと家族の地域生活を支援する看護の実際を学習していた。入院とは異なり短時間で終了する診察場面

表1 小児科外来実習における看護学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
複数の専門外来の存在	専門分野に分かれた外来 多様な疾患の治療と対応 医師による丁寧な診察
成長・発達途上にある子どもの特性	成長と発達を確認 子どもの発育過程に喜びと驚き 観察の重要性 子どもの多様性
小児処置技術の特殊性	処置を受ける子どもの苦痛 子どもサイズの器具と道具 子どもの処置に必要な特殊な技術
安全・安楽な看護実践	子どもの安全を確保する看護 子どもの負担軽減を考えた看護
子どもを力づけるかわり	子どもへの言葉かけ（称賛）の重要性 子どもの意欲を引き出す工夫 子どもの処置場面に心痛 ブレバレーションやディストラクションの実際
看護の対象は子どもと家族	親の存在の重要性 子どもと親のつながり
育児不安の実際	家族の不安の理解と対応 育児不安を軽減する受容的なかわり
子どもと家族の地域生活支援	在宅療養支援の実際 継続看護の実際 病院・地域における専門職間の連携 キャリアオーバーの問題
看護師の現場調整力	多様・多忙な看護師の役割 看護師の対人関係能力に感心 外来診察時間の調整と短縮 丁寧な診察場面の創造
発育に配慮した看護実践を体験	実習で多くの業務（場面）を見学・実施 子どもを抱くなど自分が役立つ充実感 学んだ看護を実践で取り入れる意欲

において、その時間が子どもと家族にとって有効な時間になるよう診察の順番などの調整を行う外来看護師の調整能力についても記述がみられた。

多くの診察場面の見学や処置の介助など実践を通して小児科外来での実習に充実感がうかがえ、学んだことを活かしていきたいという意欲がみられた。及川⁶⁾は外来看護の役割が診療介助のみならず、子どもや家族のヘルスアセスメントを的確に行い、子どもや家族が主体的に療養していくができるように支えていくことが多くなっている外来の場を活用した、より具体的な実習方法を模索する提案をしている。外来実習において1組の受診する子どもと家族の受診過程を学生と一緒に体験するということも効果的な実習方法とされている⁷⁾。本講座でも小児科外来看護実習を継続し、外来の状況によって実習方法を検討しながら、入院から退院後の継続看護の実際や、子どもと家族への在宅療養支援について理解を深められるよう目指したい。

VI 結論

小児看護学実習における外来実習記録を分析し、看護学生の学びを明らかにした。

1. 各種専門外来の存在と専門医による丁寧な診察
および看護場面から育児支援・療養生活支援について学んでいた。
2. 地域での継続支援において看護の対象は子どもとその家族であることを理解していた。
3. 限られた時間と看護スタッフという環境の中で、子どもの安全・安楽に配慮し、頑張りを引き出す支援を学習していた。
4. 充実した診察場面を設定する小児科外来看護師の調整力や他職種との連携について学んでいた。
5. 看護や診察場面の見学のみではなく、子どもの発育に配慮した看護実践を体験していた。

謝辞

外来実習において看護学生にご指導くださる看護師の方々はじめ、外来師長、医師、コメディカルの皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 平成22年度日本看護協会業務委員会：外来における看護の専門性の発揮に向けた課題，平成22年度
<http://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/fukyukeihatsu/gairaikango.pdf>
- 2) 鈴木明由実，本間照子，出野慶子，大木伸子，天野里奈：小児看護学実習をとおして学生が学んだ継続看護，東邦看護学会誌 第9号，1-8，2012
- 3) 宮谷恵，小出英美子，山本智子，市江和子，高真喜，新村君枝：看護基礎教育の小児看護学実習における外来単独での病棟実習の有用性，日本小児看護学会誌，Vol. 19, No. 2, 25-31, 2010
- 4) 松下竹次監修：キャリアオーバーと成育医療—小児慢性疾患患者の日常生活向上のために—，へるす出版，2-7，2008
- 5) 奈良間美保著者代表：系統看護学講座専門分野Ⅱ 小児看護学概論 小児臨床看護総論 小児看護学，31，医学書院，2012
- 6) 及川郁子監修：子どもの外来看護，へるす出版，2009
- 7) 長谷川圭子，石井康子：小児科外来実習からの学生の学び，岐阜県立大学紀要，第8巻1号，11-18，2007